単元名：変わり続ける大地（第2次 私たちのくらしと災害）		
氏名：山本 正太	学校名：神戸市立横尾小学校	
担当教科：理科	実践教科：理科	
時間数：7時間	対象学年：6年	人数：25人

【実施概要】

【1】単元のテーマ：大地のつくりと変化・防災

地震や火山の噴火による災害や、災害に対する備えについて、調べたり考えたりすることを通して、主体的に地震に関係する言葉や、過去の記録を調べ、後世へ伝えようとする態度を育成する。

【2】単元の評価規準	(ア) 知識・技能	土地は、火山の噴火や地震によって変化することを理解している。
	(イ) 思考・判断・表現	地震など、災害に対する備えについて、問題を見出し、予想や仮説をもとに解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	①地震などの災害や災害に対する備えについて調べる活動に進んで取り組み、友達と協力して調べたり、考えを互いに伝え合ったりしながら、問題解決しようとしている。 ②地震や火山の噴火による大地の変化とそれらによる災害について学んだことを生かして、ペルーや日本で起きる災害から生命を守るためにできることを考えている。
【3】単元設定の理由	本校の児童は、神戸市での防災教育を受けていることもあり、「自助」「共助」「公助」の考え方をバランスよく学習している。特に、「しあわせ運ぼう」というテキストは数年に一度アップデートされており、新たに起きた災害についても学習の中で新たな知識として身についている。そして横尾小学校では、例年地域の防災コミュニティや消防署、警察署と連携をとって、土曜日に学校行事として合同防災訓練を行ってきた。全学年の児童が参加し、消火器訓練や応急処置の仕方、地震の体験など、地域の方とともに防災について考えてきたことで、他の地域よりも防災に深く関わってきたと言える。しかし、コロナ禍以降、教育カリキュラムの関係もあり、地域との防災訓練は学校行事ではなく、地域主催の訓練に変わったことで参加人数が減少している。それにより、地域の方がどのような備えをしているのか、どのように助け合って活動しているのかなどについての意識が薄まってきている。また、家庭によっての意識の違いもあり、どこか自分ごととして捉えられていない児童も多い。また、災害未経験の大人も増えており、地域活動に参加する人の高齢化も問題の一つになっている。 本単元は、噴火や地震による土地の変化を調べていく内容だが、後半ではそれらによる災害や、その備えについて、調べたり、考えたりする活動が主体となっている。日ごろの家庭の備えや、町や学校にある災害の備え、地域のコミュニティの在り方などを今一度確かめることで、一人でもけがをしたり命を落としたりする人を少なくするには、今の自分たちに何ができるのかを考えられる良い機会となる教材と言える。	

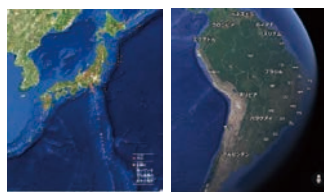
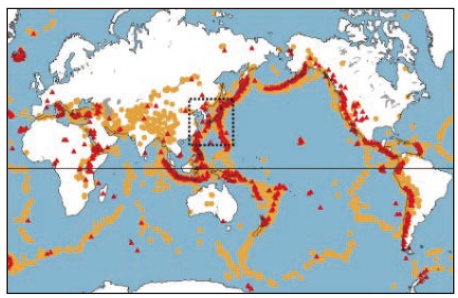
指導にあたり、授業者が本年度に経験した「ペルー教師海外研修」で学んだことを児童に還元することも目的の一つとなっている。ペルーは日本と同じく地震が多い国であり、地域の防災環境や、市民の防災教育も大きな課題となっている。大きな災害を経験したことで、全国民で同じタイミングで行う避難訓練や、地域での活発な防災活動が行われている。また、日本からの協力のもと、耐震技術の研究なども進められている。そこで、ペルーでけがや命を落とす人を一人でも少なくするために、懸命に活動している方との交流を通して、児童が、自分のこと、身の回りのことに目を向けて、足りないことや必要なことについてしっかりと考えられるようにしたい。

そのために、JICA草の根技術協力事業を通じてミ・ペルー区の防災活動に従事しているジェラルド・セグラ氏に協力を依頼する。セグラ氏がどのような活動をしているのか、どんな思いで地域に協力しているのか、地震が起きたときに考えられる被害、ペルーの防災活動の問題点など、質問を通して自分たちの意識の違いを感じ取らせるようにする。そこで災害から身を守るために、自分たちにできることを考え、話し合う活動へとつなげたい。また、ペルーの防災活動に向けて自分たちが協力できることはないか話し合い、行動することで、未来につながる国際的な視点を身に付ける機会にしたい。

最後に今年度は阪神・淡路大震災から30年ということもあり、神戸市では、消えてはならない震災の「ともしび」を振り返り、考えることで、市民全体の防災意識を見つめ直す1年とされている。この度の授業だけではなく、他の教科や行事を通じて子供たちが神戸の防災を知り、そして、自分の身の回りの防災について考えることが、誰もが安心して過ごすことのできる未来を創っていくことになると気づいてほしい。

いつも　こころに　ともしびを
「みつめる」「いかす」「つなぐ」
阪神・淡路大震災30年　ともしびプロジェクト

【4】展開計画（全6時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	地震や火山の噴火と大地の変化 ・地震や火山の噴火による大地の変化について調べる活動に取り組むことができる。 ・調べたことを基に考察し、土地は火山の噴火や地震によって変化することを捉えることができる。	・世界のプレートの写真や、そこで起きている火山の噴火や地震が起きた場所の分布図を見て、大地がどのように変化していくのかを調べる。 ・同時にペルー近くの断層にも注目し、ペルーも日本と同じく地震が多い国だということを知る。   ●大きい地震が起きたところ　▲火山	・パソコン

2 3	私たちのくらしと災害 ・地震や火山の噴火による災害について調べる活動に進んで取り組み、災害に備えることの重要性を考えることができる。	・地震や火山の噴火によって、どのような災害が起きるか考え、話し合う。 ・地震や火山の噴火によって、これまでにどのような災害が起きたのかを知る。 ・日本だけでなく、ペルーで起きた災害についても同時に調べる。 ・フォトランゲージで日本や、ペルーの災害が起きた様子について考える。 ・現時点での防災意識レベルを可視化する。(forms)	・教科書 ・パソコン ・写真

（土地の変化「ずれる」「くずれる」）

（ペルーの地震で起きた土地の変化）

（防災意識レベルアンケート）

4 本時	地震による災害から生命を守るために、自分たちにできることを考える。 ・神戸の「BOSAI」を届けるジェラルドさんからのお話を聞き、ペルーの防災の取組を知ることで、備えることの意識の違いに気づくことができる。	・ジェラルドさんからのお話を聞く。 〇ペルーへ行ったきっかけ 〇どのような活動をしているのか 〇地区で地震が起きた時に考えられる被害 〇地区の防災活動の問題点 〇どのような思いで活動しているのか ・ジェラルドさんからの話を聞いて感じたことや思ったことを話し合う。 ・話し合いの中から、自分たちの問題点を出し合う。	ゲストティーチャー （ジェラルドさん）
5 本時	地震による災害から生命を守るために、自分たちにできることを考える。 ・話を聞いて、自分の防災意識レベルを上げるためには何ができるのかを考え、話し合うことができる。	・地震による災害で、一人でも多くの生命を守るために自分ができることを考える。 ・「備える」「生命を守る行動」などテーマ別に考えることができるようにしたり、標識やハザードマップ、学校周辺の様子などを提示してヒントにしたりする。 ・防災意識レベルの変容を可視化する。（スカイメニュー）	
6 7	ペルーの人々に神戸の「BOSAI」を届けよう。 ・同じ地震が多い国に住むペルーの人々の生命を守るために何ができるのかを考え、話し合うことができる。	・ペルーの人々に自分たちができることを考え話し合う。 （例） 〇ペルーの防災ポスターコンクールに参加する 〇防災グッズ子供バージョンを考える 〇ペルー地区に合う、ピクトグラムを考える 〇避難するときの標語を考える 〇役立つ防災グッズを紹介する ・実際に作成したものをジェラルドさんに送ることをめあてに話し合いを進める。 ・最終的な防災意識レベルの変容を可視化して振り返る。	

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （5分）	〇ジェラルドさんの紹介を聞く。	〇授業者から講師の紹介をする ・ジェラルドさんの生い立ち ・仕事 ・日本とのかかわり ・JICAとのかかわり	・パワーポイント
	ペルーの防災について話し合い、私たちの防災について考えよう		
展開1 （25分）	〇ジェラルドさんのお話を聞く。	〇ジェラルドさんからお話をしていただく ・ジェラルドさんの自己紹介 ・ペルーの地震 ・活動の内容 ・学校の防災コミュニティとの関わり ・どのような思いで活動しているのか	・パワーポイント ・発表ノート

(10分)	○質問や感想を発表する。	○ペルーの防災活動から、自分たちがよくできていること、足りないことを、感想や質問から見出す。 ・備える ・命を守る行動 ・コミュニティへの参加 ・防災環境	
展開2 (35分)	○地震による災害から一人でも多くの生命を守るために自分たちにできることを考える。	○ジェラルドさんのお話の中から見出された自分たちの問題点を中心に調べ学習を進める。 ・備える ・命を守る行動 ・コミュニティへの参加 ・防災環境 ○テーマ別に分かれて、共同編集をしながら発表ノートを作っていく。	・資料 （しあわせ運ぼう、4年わたしたちの神戸市、ハザードマップ、くらしの防災ガイドなど）
	○発表する。	○各テーブルで、半分が残り発表する。半分は他のテーブルへ行って発表を聞く。	
まとめ (10分)	○振り返る。	○防災意識レベルの変容を可視化する。 ○発表ノートに振り返りを記録する。	forms

【授業実践の様子】

セグラ氏による講話

質問や感想から、
自分の調べる内容を見出した

資料の紹介の様子

地域の防災訓練のチラシ
なども用意した

調べ学習をしている様子

調べ学習をしている様子

調べた事を発表している様子

パソコンにまとめた内容を見せながら発表していた

どのグループも積極的に発表していた

●児童がまとめた「備え」

【命をつなぐ防災パック】
防災パックの中身は、水・食料・衣類の3つ！
水）ないと一番困るのは水です。家で非難するとき用に、家族の人数×7日分を備えておくといいでしょう。人間に必要な1日の水の量は1.5～2リットルといわれています。避難所に水や食べ物が用意されているけれど足りなくなったら取りに行くようにしよう！
食料）食料は心が喜ぶ「甘いもの」と、気持ちが落ち着く「温めて食べるもの」を用意しましょう。お湯を沸かしたりできる、卓上コンロを用意しておくといいですね。家族が不安にならないように、「きそく正しく食べられる」ことも、食料を選ぶときに必要です。なるべく普段に近い食べ物や量を用意して、災害時は、食事の時間もいつも通りを意識しよう。
衣類）衣類は私たちを怪我や外気から守ってくれます。また、災害でがれきや、ガラスなどの割れ物が散乱していることもあるので靴選びは重要です。避難所に向かうときは服と下着2日分を、密閉できるビニール袋を入れておきましょう。ポイントは季節ごとに衣類を用意しておくことです。

非常用グッズは家用と外用の2種類を用意しよう！

●児童がまとめた「地域の防災」

ペルーの防災について話し合い、私たちの防災について考えよう

グループのテーマ：

地域の防災

（横尾小学校で行われる地域防災訓練）
今年も様々な自然災害が起きています。地震を体験した地域の方々が横尾小学校で地域防災訓練を教えてくれる人達がいる、12月8日午前10時からグランドで開催するのでぜひ来てください。

「土山」
2023年の12月10日に横尾小学校で行った横尾地域住民による「横尾防災コミュニティ」の内容
・放水訓練
・AED取り扱い訓練
・地震体験車「ゆれるん」の乗車
・小学校敷地内にある「ふっQすいせん」の取り扱いについて組み立てや水道蛇口から育員うことができる非常用飲料水パックへの給水の体験
などをし災害について学びました。

放水訓練

地震体験車「ゆれるん」

避難所
かく市町村では
「一時避難所」「広域避難所」「収容避難所」の三つある
地震の被害を抑えるために1人1人が身を守るため
避難訓練がある
また横尾小学校の前にある横尾山はハザードマップでは
「土砂崩れ」「土石流」「地滑り」などがある

【6】本時の振返り

ペルーの自然災害や防災の現状について、これまで授業者の視点を通して子供たちに伝えてきた。子供たちは、主にインターネットを活用して情報を集める方法を取っていたため、ペルーで起きている自然災害をどこか遠い国での出来事として捉える子が多い印象だった。しかし、今回、現地で防災活動を実際に行っているジェラルド・セグラ氏が来校し、直接話をしたことで、児童は現実味を感じ取ることができ、真剣な表情で話に耳を傾けていた様子が印象的だった。セグラ氏から「経験していなくても語り継いでください。地域の防災活動に参加してください。」という力強いメッセージを受けたことで、自然災害を自分ごととして捉えるようになった。これをきっかけに、地域の防災活動について調べたり、自分が誰かに伝えるためにどのような防災情報を知っておくべきか考えたりする姿が多く見られるようになった。

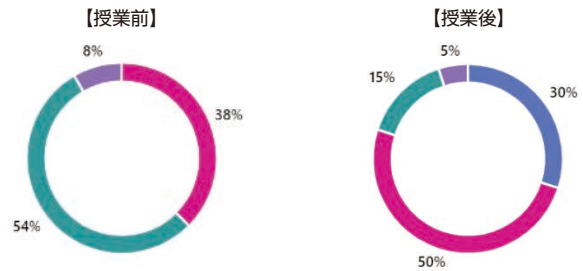
さらに、調べた内容をお互いに発表し合う中で、単に知識を得るだけではなく、防災に対する様々な視点や考え方を学び取ることができた。例えば、地域特有の災害リスクや、それに応じた対策について意見を交わす場面も見られ、クラス全体での防災への理解が深まっていく様子がうかがえた。子どもたちは、自分の生活や身近な地域と防災とのつながりを意識し始めており、授業中に得た知識を活かして家に帰って防災について家族と話し合ったり、地域の防災活動に参加してみようと考えたりするなど、行動にも変化が見られるようになることを期待している。今回の授業は、単なる情報提供に留まらず、子供たちが主体的に防災について学び、自分の生活や未来に結び付けて考える良い機会になった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

●防災意識レベルアンケートより

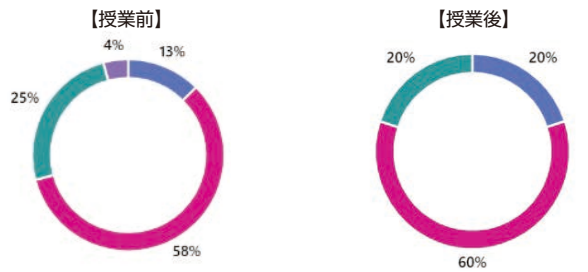
1.**地震が起きるしくみ**を理解している（0点数）

5. 地震の仕組みを完全に理解しており、なぜ地震が起きるのか説明できる	6
4. 地震の仕組みをよく理解しており、基本的な説明ができる	10
3. 地震の仕組みについてある程度理解しているが、詳しくは説明できない	3
2. 地震の仕組みを知っているが、理解が浅く説明できない	1
1. 地震の仕組みを全く理解しておらず、説明できない	0



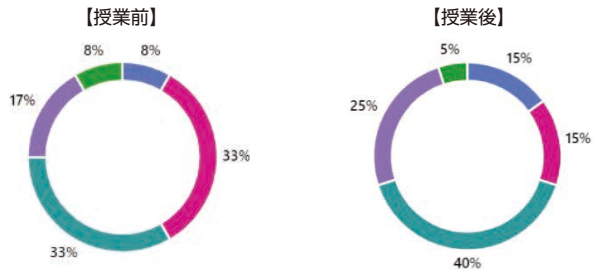
2. 地震や火事が起きたとき、**どのように行動するかを知っている**（0点数）

5. 完全に理解しており、適切な行動をすぐに取れる	4
4. よく理解しており、適切な行動を取れる	12
3. ある程度理解しており、行動に迷うことがある	4
2. 少ししか理解しておらず、適切な行動が取れない	0
1. 全く理解しておらず、どう行動すればいいか分からない	0



3. あなたの家に**避難場所と連絡手段**が決まっている（0点数）

5. 避難場所と連絡手段が家族全員で確認され、準備が完全に整っている	3
4. 避難場所と連絡手段は決まっており、ほぼ準備が整っている	3
3. 避難場所と連絡手段が一部決まっているが、まだ確認不足な部分がある	8
2. 避難場所または連絡手段が決まっていない、もしくは不完全な状態	5
1. 避難場所も連絡手段も全く決まっていない	1



4. **防災用品**（食料、水、応急手当など）は整っている（0点数）

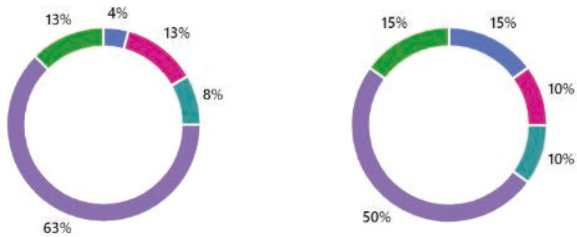
5. 必要なすべての防災用品が揃っており、定期的に点検している	2
4. ほぼ必要な防災用品は揃っており、点検もしている	7
3. 一部の防災用品は揃っているが、いくつか不足している	6
2. 必要な防災用品がほとんど揃っていない	2
1. 防災用品が全く整っていない	3

5. 災害時に**情報を得る方法**（テレビ、ラジオ、インターネットなど）を知っている（0点数）

5. 複数の方法（テレビ、ラジオ、インターネット、SNSなど）で情報を得ることができ、すぐに実行できる	6
4. 主要な方法（テレビやインターネットなど）で情報を得ることができる	10
3. 情報を得る方法は知っているが、すぐに実行できる自信はない	3
2. 何となく方法を知っているが、実際に情報を得るのは難しい	1
1. 情報を得る方法を全く知らない	0

6.**地域の防災活動**に参加したことがある（0点数）

5. 地域の防災活動に積極的に参加し、活動内容にも詳しい	3
4. 地域の防災活動に参加したことがあり、ある程度理解している	2
3. 地域の防災活動に参加したことがあるが、あまり詳しくない	2
2. 地域の防災活動には参加したことがないが、興味がある	10
1. 地域の防災活動には全く参加したことがなく、興味もない	3



授業を進めると、防災意識レベルが少しずつ上昇していた

●ふりかえりより

【授業前】

・何が足りないかやどこに避難すればいいかを見直せるいい機会だと思いました。
・火災や震災はいつ起こるかわからないけどその時のために普段から点検や準備を行うことが大切。
・地震や火事が起きた時、落ち着いて行動ができるようにすることを考えた。
・まだやれていないことがあるから、もし地震が来た時の備えを整えておこうと思いました。
・いつどんなに大きい地震が起こるのか分からないのでちゃんと備えておきたいです。
・自分は避難経路などをほぼ知らないし非常食も知らないので災害にあったら危ない。

【授業後】

・国によって地震の起こり方や対策の仕方は違うけどお互いに助け合っていることが分かった。
・地震などの自然災害では対策などをしないとけがをしてしまうから早めに準備を終わらせないといけない。
・自分の命を守るためだけの行動するのではなく、みんなの命も守れるような行動をする。
・地震が起きると慌てないで、家族全員が避難することができるようにしようと考えた。
・すぐそばにあるような場所に非常用グッズを置いておくとよい。水と食料と衣類は非常用グッズの中に入れておく。特に水は大切。食料はあたたかいものと、心が落ち着くあまいものを入れておくとよい。卓上コンロもいる。
・災害対策は非常用グッズを用意するのももちろん大事だが、地震のことを忘れず受け継いでいくことも大切、いつどんな時地震が起こるか分からないから常に油断しない。また地震にもっと関心を持つことも大切だなと思いました。

・僕は地域の防災活動に一回も参加したことがないので今年の12月8日午前10時頃から学校で防災訓練があるので友達と一緒に参加しようと思います。
・防災をするためには日ごろの準備や意識する気持ちを持っておくということにこの単元を通して気づきました。わたしももっと地域の訓練などに参加してより防災のことについて知ろうと思いました。
・この学習を通して地震の時は机の中に入って頭を守るだけではなくて、その前の防災リュックの備えをしたり家具の置き場所の工夫をしたり、ヘルメットや座布団でも頭を守ることができるということが知れたのでいつ、どこで、地震が起きるのかが分からないけれどもしものことを考えて日ごろの災害への意識を持とうと思いました。
・防災グッズは大事だけれども自分の頭で考えて行動することが一番大事だなぁと私は考えました。自分で何か行動できないと被災した時に困ってしまうし、迷っている時間で、亡くなってしまう人もいるかもしれないから、自分が助かるのにも分かっていないといけないし、人を助けるのにも必要だから自分が理解していないと意味がないなと思いました。
・この勉強をして気づいたことは、完全に準備するだけではなく、人をすぐに助けたり、協力したりすることが大切だということです。なぜかというと、人をすぐに助ける事が出来る強い心、協力して助け合ったりすることがみんなで生き残れると考えたからです。だから、今からでも困っている人がいたらすぐに助けたり、日頃から友達と協力して助け合ったりしていこうと思います。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

この単元「変わり続ける大地」を通じて、児童の態度や学習意欲に変容が見られた。地震の仕組みや、地震が引き起こす土地の変化、災害時の身の守り方について調べる中で、子供たちは防災に対する意識を高め、自分事として捉えるようになった。特に、ジェラルド・セグラ氏からの「経験していなくても語り継いでください」「神戸の防災教育に誇りを持ってください」「地域の防災活動に参加してみてください」というメッセージを受けて、子供たちの反応が変わった。これまで防災に対する関心が低かった子も、「家族と話してみよう」「地域の防災活動に参加してみたい」「ペルーの防災活動で私たちにできることはないかな」といった意欲的な感想を持つようになった。

また、国際教育を通じて、異なる国や文化の防災対策について学ぶことで、子供たちは自分たちの地域だけでなく、世界全体での災害への備えの重要性を理解するようになった。特に、ペルーの防災訓練や緊急時の対応方法を比較しながら、災害時にどう行動すべきか、普段からどのような準備が必要かを考える機会を得ることができた。これにより、子供たちは実際の災害に備えた具体的な知識を身につけ、互いに協力しながら災害に強い社会を作る意識が芽生えた。国際教育を通じて、自分たちの安全を守るだけでなく、他者を助ける重要性にも気づくことができた。

さらに、地域の防災活動への関心も高まり、特に高齢化が進んでいる地域において、次世代の防災活動への参加意識が育まれた。子供たちは防災活動に対して「自分たちが積極的に参加していくべきだ」と考えるようになり、地域の防災活動に対する新たな意識が芽生えた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

（授業前）

これまで子供たちは外国語の学習で世界のことを学んでいる程度であり、外国について深く考えることは少なかった。教師がペルーでの海外研修の報告をした際にも、「ペルーは遠い国だな」「食べ物が美味しそう」「世界遺産があるんだな」といった感想をもったに過ぎなかった。ペルーの地理的な特徴や社会的背景、さらには防災に関する問題について考えることはほとんどなかった。

（授業後）

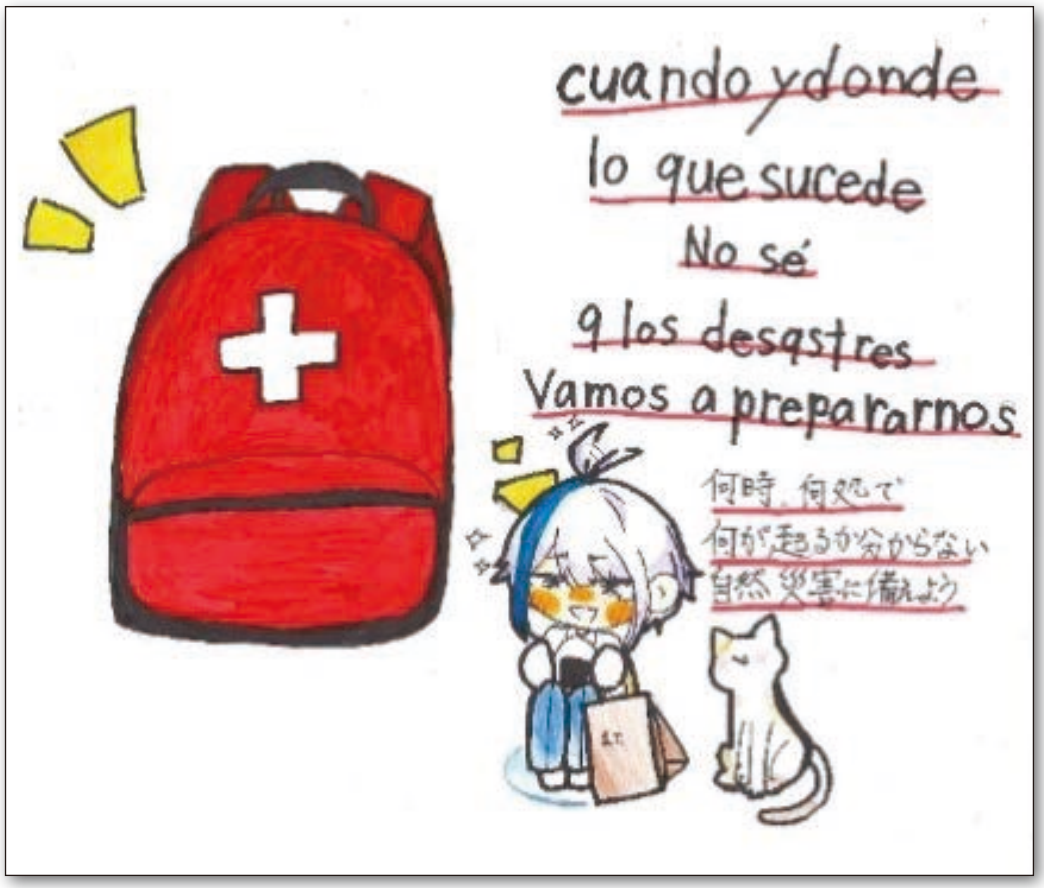
この単元を進める中で、子供たちはペルーが日本と同じく地震が多い国であることを学び、ペルーの防災状況についても考えるようになった。ペルーの地盤がゆるく、土砂崩れが大きな被害を引き起こすことや、家の耐震が進んでいないために建物が崩れやすいことについて学んだ。これにより、開発途上国が抱える防災の難しさに気づき、子供たちの防災に対する認識が広がった。また、日本とペルーでは避難方法が異なることに気づき、ペルーでは「すぐに逃げる」「柱の近くに逃げる」といった避難の仕方が一般的であることを知り、異なる文化や防災の方法について考えるようになった。

単元の終わりには、子供たちが「ペルーのためにできること」について考え、積極的に行動しようとしている様子が見られた。例えば、ペルーに役立つ防災の本を紹介したい、JICAについて調べてみたい、または日本の防災に関するピクトグラムをペルーで使えるように紹介したいといった意欲的な意見が出された。さらに、ペルー向けの防災グッズを提案したいという児童も現れ、実際に調べて発表を準備している姿が見られた。

このように、単元を通して、子供たちはペルーという国の防災状況に関心を持ち、異文化や多文化共生について深く考えるようになった。変容前は単なる知識としてしか捉えられていなかった異文化や防災に対する関心が、今では自分たちができる貢献を考える積極的な態度に変わった。

第6時と第7時では「ペルーの防災について、自分ができること」をテーマに以下のとおり調べたことをまとめた。

●「防災ポスターコンクール」に合わせて作成した防災ポスター



●「ペルーに紹介したい防災の本」

●「ペルーに紹介したい私たちの地域の防災」

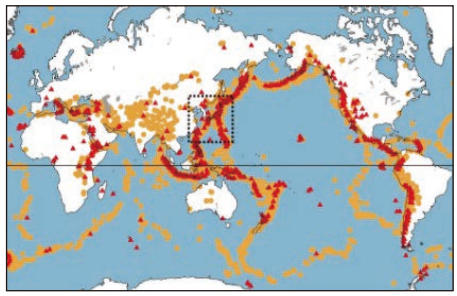
【8】自己評価

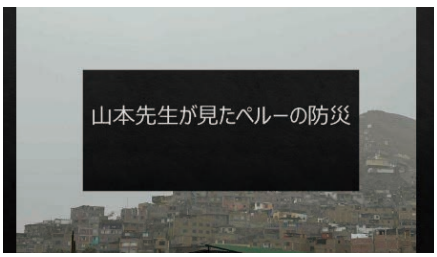
1. 苦労した点	防災というテーマに国際的な視点を加えて計画することに少し難しさを感じた。特に、ペルーの地震に関する資料を探すのに時間がかかり、どの情報が正確で信頼できるものかを見極めることに工夫が必要だった。ペルーの防災に関する具体的なデータや事例が限られており、情報収集には少し手間取った。

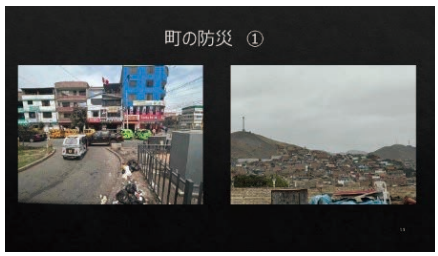
	また、ペルーの防災に精通した方にゲストティーチャーとして来ていただくことについても悩んでいた。誰を招待するのが適切か、どのように連絡を取るかで迷っていたが、最終的にJICAの方の提案を受け、適任のゲストティーチャーを決めることができた。ゲストティーチャーの手配は、児童にとって貴重な学びの機会となった。 さらに、児童に地域の防災に目を向けてほしいと考えていたため、地域の防災コミュニティや活動についての情報を集めるのに少し苦労した。特に、地域の防災教育や活動の現状を把握することが難しく、情報収集に時間がかかる場面があった。 また、決められた単元の時間内で全ての内容を学習させることが難しかった。教科書に基づいた授業時間ではペルーの防災や地域の防災活動を十分に学ぶことができないと考え、2時間の追加時間を設けることにした。これにより、授業内容をしっかりと進めることができたが、時間の調整には少し工夫が必要だった。
2. 改善点	まず、防災コミュニティに関する情報をもう少し充実させて提供できたらよかったと感じている。地域の防災活動についてさらに詳しい情報を児童たちに伝えることができれば、児童たちの地域に対する関心がもっと深まったのではないかと思う。特に、地域の具体的な防災活動や、地域住民がどのように協力しているのかについて、もっと多くの実例を紹介できれば、実際の防災活動に対する理解を深めることができたように思う。 また、防災コミュニティに参加している地域の方をゲストティーチャーとして招くことも有益だったと感じている。地域で防災活動に携わっている方から直接話を聞くことで、子供たちは実際の経験を通じて学ぶことができたのではないかと思う。地域の活動に従事している方々がどのような工夫や取り組みをしているのかを知ることで、地域活動に対する意識も高まっただろう。 さらに、国際的な視点で考えると、JICAの活動や開発途上国への支援、また外国で災害が発生した際に日本がどのように支援を行っているかについても触れることができればよかった。ペルーとのつながりを深めるだけでなく、広い視野で国際的な防災協力について考えることができたなら、子供たちの国際感覚や社会貢献への意識をさらに高めることができたと感じている。 最後に、ペルーの学校とオンラインで防災について伝え合う活動を取り入れることができたら、より実践的で深い学びの機会を提供できたのではないかと思う。実際にペルーの子供たちと防災に関する意見交換を行うことで、異文化理解を深めるとともに、よりリアルな視点で防災について考えることができただろう。
3. 成果が出た点	この授業を通して、いくつかの重要な成果が見られた。まず、子供たちが防災について「自分事」として考えることができるようになったことが大きな成果である。単元を通じて、防災が自分や家族、地域社会にとって重要な問題であると認識し、具体的な行動に繋げようとする姿勢が見られた。特に、「家族と防災について話してみよう」「防災グッズを家で確かめてみたい」といった声が上がり、実生活での意識が高まったことがわかった。 また、現地で活躍するゲストティーチャーに来てもらったことで、子供たちは国際的な視点から防災について学ぶことができた。特に、ペルーでの防災活動に関わるゲストティーチャーの話を聞くことで、児童たちは実際の防災活動の現場を知り、よりリアルな感覚で防災について考えることができた。この経験は、子供たちにとって貴重な学びの機会となった。

	さらに、地震が引き起こす土地の変化だけでなく、地震が起きる仕組みや、その土地の変化がどのように災害につながるかを想像しながら学習を進めることができた。単に知識を詰め込むのではなく、災害の背景や影響を考えながら学ぶことができ、理解が深まった。 また、災害が人々の命に関わる重要な問題であることについても理解を深めることができた。防災教育を通じて、子供たちは災害に対する責任感や、命を守るための意識を高めたと感じている。 加えて、神戸の防災教育がペルーに伝わるほどの価値のあるものであることを実感できた。特に、ペルーでの防災活動に対する日本の貢献を知り、神戸の防災教育が国際的に評価されていることを誇りに思う気持ちが芽生えた。 最後に、震災を経験していなくても、大人になったときに誰かを守れるように語り継いでいかなければならないということを理解したことも大きな成果である。ゲストティーチャーの言葉を受けて、「経験していなくても語り継ぐことが大切だ」という意識が強く芽生え、自分たちもその一員として、防災の知識や意識を未来に伝えていく役割があることを自覚した。 これらの成果を通じて、子供たちは防災に対する積極的な態度と国際的な視野を持つようになり、今後の生活や社会活動において重要な意識を持つことができたと感じている。
4. 備考	この授業を通して、授業者自身の防災意識も高められたと感じている。ペルーでの防災活動に関する学びや、現地で活動している方々の熱意に触れる中で、防災への取り組みの重要性を改めて認識した。特に、JICAの活動を現地で知り、彼らがどのような課題に取り組み、どのような工夫をしているのかについて深く考えることができた。また、海外研修の中で神戸の防災について発表したことで、自身の育った地域で行われている防災教育の価値に気づき、神戸の防災が世界でどれほど重要な意味を持つのかを実感した。 これからの子供たちが生きる未来には、多文化共生の考え方がますます大切になってくると強く感じている。社会がますますグローバル化し、異なる文化や背景を持つ人々と共に生活することが当たり前になっていく中で、他者を理解し尊重する態度が重要になるからだ。多文化共生は、ただの文化的な多様性を受け入れるだけではなく、異なる価値観や視点を尊重し、共により良い社会を作り上げていくために不可欠な考え方である。特に、防災教育のように、地域や国を越えて協力し合わなければならない場面では、文化的背景の違いを理解し合いながら共に行動することが求められる。 国際的な視点を育むためには、外国語活動だけではなく、他の教科や活動においても意識的に取り組むことが大切だと感じている。例えば、歴史や社会科で他国の文化や社会問題について学ぶことや、日常の授業で異なる視点を持つことが多文化共生の実践につながる。これからは、教科横断的に異文化理解や国際的な協力の大切さを伝える授業を進めていきたいと考えている。 この授業を通して、子供たちの学びだけでなく、授業者自身の視野や意識も広がり、今後の教育活動に対する新たな視点を得ることができたと感じている。

添付資料







参考資料

JICAホームページ

在日日系人が培った知識と経験を生かしたコミュニティ防災力強化事業/ペルー/ 中南米/ 各国における取り組み - JICA
https://www.jica.go.jp/Resource/peru/office/activities/project/04.html

Google earth

北淡震災記念公園 野島断層保存館 パンフレット